



馬耳東風

以前から体操競技やフィギュアスケートでは10代の選手がトップを争うのは、当たり前のことであったが、近頃体力がものをいうプロ野球の世界でも、若手の活躍が目立つようになってきた。ヤクルトスワローズの村上宗隆選手は、今年高卒2年目にしてチームの主軸として36本塁打、96打点を記録した。また、広島カープの小園海斗選手は、シーズン後半、カープのセリーグ・ペナントレース3連覇に貢献した田中選手に替わってショートを守り、去年まで高校生であったことが信じられないような堅実な守備と打撃を披露してくれた。この他、各チームとも従来ならファームで鍛えられているような若い年代の選手の活躍が顕著になってきた。何故だろうとその理由を考えていて、現在プロ野球で活躍している選手のほとんどは、高校時代に甲子園に出場した経験のある人達であることに気づいた。コトの是非はさておいて、彼等は野球の早期教育を受けてきた人達なのである。私が早期教育という言葉を知ったのは、幼児の音楽教育であり、音楽の演奏能力は、若いというよりも幼児期から始めないと一流にはなれないことは昔からよく知られている。

将棋や囲碁の世界も同様らしい。昨年、藤井聡太さんが15歳9カ月で将棋の七段になったと話題になったので調べてみると、中学時代にプロ棋士になったのは彼以外にも加藤一二三、谷川浩司、羽生善治、渡邊 明と4人おり、いずれも単に早熟というだけでなく、一流の棋士となっている。囲碁の世界では、今年、仲邑 堃さんが10歳0カ月でプロ入りして啞然とさせられたが、彼女の師匠は父親、母親は元囲碁インストラクターという

恵まれた環境に育ち、3歳で囲碁を憶えたという。また昨年女流棋聖となった上野愛咲美さんは、17歳の今年、男女の別なく争われる竜星戦で準優勝し、さらに芝野虎丸さんが史上初めて19歳で名人位を獲得する等、囲碁界は若い力に満ちている。

認知症予防に少しでも効果があるのではないかと期待して、これまで全く縁のなかったフランス語を勉強し始めて1年が経過した。しかし、あきれるほど記憶にはほとんど何も残っていない。英語嫌いだった中学生の私に、母が口癖のように言っていた「語学は若いうち」という言葉が耳に響く。人間の脳の言語中枢の発達には5歳でピークに達するとのことである。そのあとどのような経過を辿るのかは知らないが、私は言語中枢はフタのついた器のようなものなのではないかと考えている。このフタは5歳で全開になり、全開の間は器に向かった言語はどんどん中に飛び込むが、年齢と共に次第に閉まりはじめ、私の年齢ではバタンと閉じる寸前となっているのではないか。だとすれば、そのわずかな隙間から中に入れるには相当の努力が必要とされるのは当然であろう。

若い力が目立つ囲碁、将棋界ではあるが、先日将棋の木村一基九段（46歳）が17歳年下の豊島将之九段を下して第60期王位を獲得した。初めてのタイトルだという。タイトルを初めて獲得した年齢は、これまでは有吉道夫九段の37歳が最高齢で、これを46年ぶりに大幅に更新したのである。若い力の活躍はもちろん素晴らしいが、木村九段の粘りも素晴らしい。彼を見習ってといえど失礼になるかもしれないが、私もあきらめずに狭い隙間を目指して言葉を投げ込む努力だけは続けたいと思っている。（久）